

# 四又《よまた》の百合《ゆり》

宮沢賢治

青空文庫



「正徧知しょうへんちはあしたの朝の七時ごろヒームキヤの河かわをおわたり  
 になってこの町にいらつしやるそうだ」

こいう言ごう語ごがすきとおつた風といつしよにハームキヤの城しろの家  
 々にしみわたりました。

みんなはまるで子供こどものようなにいそいそしてしまいました。なぜ  
 なら町の人たちは永ながい間まどんなに正徧知しょうへんちのその町に来るのを望のぞ  
 んでいたかしのれないのです。それにまた町からたくさんの人たちが  
 正徧知しょうへんちのそこへ行つてお弟子でしになつていたのです。

「正徧知しょうへんちはあしたの朝の七時ごろヒームキヤの河かわをおわたり  
 になってこの町にいらつしやるそうだ」

みんなは思いました、正徧知しょうへんちはどんなお顔かほいろでそのお眼めは  
どんなだろう、噂うわさの通り紺こんいろの蓮華れんげのはなびらのような瞳ひとみをし  
ていなさるだろうか、お指ゆびの爪つめはほんとうに赤銅しゃくどういろに光る  
だろうか、また町から行つた人たちが正徧知しょうへんちとどんなことを言  
いどんななりをしているだろう、もうみんなはまるで子供こどものよう  
にいそいそして、まず自分の家をきちんととのえ、それから表  
へ出て通りをきれいに掃除そうじしました。あつちの家からもこつちの  
家からも人が出て通りを掃はいております。水がまかれ牛糞ぎゅうふんや  
石ころはきれいにとりのけられ、また白い石英せきえいの砂すなが撒まかれま  
した。

「正徧知しょうへんちはあしたの朝の七時ごろヒームキヤの河かわをおわたり

になつてこの町にいらつしやるそうだ」

もちろんこの噂は早くも王宮に伝わりました。

「申し上げます。如来正徧知はあしたの朝の七時ごろヒムキヤの河をおわたりになつてこの町にいらつしやるそうでございます」

「そうか、たしかにそうか」王さまはわれを忘れて瑪瑙で飾られた王座を立たれました。

「たしかにさようと存ぜられます。今朝ヒムキヤの向こう岸で説法のをハムラの二人の商人が拜んで参つたと申しませう」

「そうか、それではまちがいあるまい。ああ、どんなにお待ち

しただらう。すぐ町まちを掃除そうじするよう布令ふれを出せ」

「申し上げます。町まちはもうすつかり掃除そうじができてございます。

人民じんみんどもはもう大おお悦よろこびでお布令ふれを待またずきれいに掃除そうじをい

たしました」

「うう」王まさまはうなるようにしました。

「なお参まいつてよく粗匆そそうのないよう注ちゆう意いいたせ。それから千人

の食しょく事じのしたくを申もうし伝つたえてくれ」

「かしこまりました。大膳職だいぜんしよくはさつきからそのご命めいを待まち

かねてうろうろうろ厨くりやの中なかを歩きまわっております」

「ふう。そうか」王まさまはしばらく考えていられました。

「すると次つぎは精しょう舎じやだ。城じやう外がいの柏かしわ林ばやしに千人せんにんの宿やどをつ

くるよう工作のものへ言いつてくれないか」

「かしこまりました。ありがたい思おぼしめし召めいでございます。工作の方のものどもはもう万まんいち一いちご命令めいれいもあるかと柏かしわ林はやしの測そくり量りょうにとりかかっております」

「ふう。正しょう徧へん知ちのお徳とくは風のようにみんなの胸むねに充みちる。あしたの朝はヒームキヤの河かわの岸きしまでわしがお迎むかえに出よう。みなにそう伝つたえてくれ。お前は夜明の五時に参まれ」

「かしこまりました」白しろ髯ひげの大だい臣じんはよろこんで子こ供どものように顔を赤くして王さまの前まへを退さがりました。

次の夜明になりました。

王おう様さまは帳とばりの中で総そう理り大だい臣じんのしずかにはいつて来る足音あしおとを聴き

いてももう起きあがっていられました。

「申し上げます。ただいまちようど五時でございます」

「うん、わしはゆうべ一晩ねむらなかつた。けれども今朝わ

しのからだは水晶すいしやうのようにさわやかだ。どうだろう、天気は

王さまは帳とばりを出てまっすぐに立たれました。

「大へんにいい天気でございます。修彌山しゆみせんの南側みなみがわの瑠璃るり

もまるですきとおるように見えます。こんな日如来にょらいしやうへんち正徧知は

どんなにお立派りっぱに見えましょう」

「いいあんばいだ。街まちは昨日きのうの通りさっぱりしているか」

「はい、阿耨達湖アノブダブこの渚なぎさのようでございます」

「齋食とぎのしたくはいいか」



「もうすっかりできております」

「柏かしわ林ばやしの造ぞう営えいはどうだ」

「今朝けさのうちには大だい丈じょう夫ふうでございませう。あとはただ窓まどをととのえて掃そう除じするだけでございませう」

「そうか。ではしたくししよう」

王わさまはみんなを従したがえてヒームキヤの川かわ岸ぎしに立たれました。風かぜがサラサラ吹ふき木の葉はは光ひかりりました。

「この風はもう九月の風だな」

「さようでございませう。これはすきとおったするどい秋あきの粉こなでございませう。数知れぬ玻はり璃りの微み塵じんのようございませう」

「百合ゆりはもう咲さいたか」

「つぼみ  
蕾はみんなできあがりましてございます。秋風あきかぜの鋭い粉するとこなが

その頂上ちようじようの緑みどりいろのかけ金を削がねつて減けずしてしまします。今朝けさ

一いっせい齊せいにどの花も開くかと思われます」

「うん。そうだろう。わしは正偏知しょうへんちに百合ゆりの花をささげよう。

大蔵大臣おおくらだいじん。お前は林へ行つて百合の花を一ひとくき茎見つけて来て

くれないか」

王さまは黒髯くろひげに埋うまった大蔵大臣おおくらだいじんに言いわれました。

「はい。かしこまりました」

大蔵大臣おおくらだいじんはひとり林の方へ行きましました。林はしんとして青

く、すかして見ても百合ゆりの花は見えませんでした。

大臣だいじんは林をまわりました。林の陰かげに一軒けんの大きなうちがあり

ました。日がまっ白に照つて家は半分あかるく夢のように見えました。その家の前の栗の木の下に一人のはだしの子供がまっ白な貝細工のような百合の十の花のついた莖をもつてこつちを見  
ていました。

大臣は進みました。

「その百合をおれに売れ」

「うん売るよ」子供は唇をまるくして答えました。

「いくらだ」大臣が笑いながらたずねました。

「十銭」子供が大きな声で勢よく言いました。

「十銭は高いな」大臣はほんとうに高いと思ひながら言いま

した。

「五銭」子供がまた勢よく答えました。

「五銭は高いな」大臣はまだほんとうに高いと思ひながら笑つて言いました。

「一銭」子供が顔をまっ赤にして叫びました。

「そうか。一銭。それではこれでいいだろうな」大臣は紅宝玉の首かざりをはずしました。

「いいよ」子供は赤い石を見てよろこんで叫びました。大臣は首かざりを渡して百合を手にとりました。

「何にするんだい。その花を」子供がふと思いついたように言いました。

「正偏知にあげるんだよ」

「あつ、そんならやらないよ」 子供は首かざりを投げ出し  
 た。

「どうして」

「僕がやろうと思つたんだい」

「そうか。じゃ返そう」

「やるよ」

「そうか」 大臣はまた花を手にとりました。

「お前はいい子だな。正徧知がいらつしやったらあとについ

てお城へおいで。わしは大蔵大臣だよ」

「うん、行くよ」 子供はよろこんで叫びました。

大臣は林をまわつて川の岸へ来ました。

「立派りっぱな百合ゆりだ。ほんとうに。ありがとう」王様おうさまは百合ゆりを受  
けとつてそれからうやうやしくいただきました。

川の向むこうの青い林のこっちにかすかな黄金きんいろがぽつと虹にじの  
ようにのぼるのが見えました。みんなは地にひれふしました。王  
もまた砂すなにひざまずきました。

二億おくねん年ばかり前どこかであったことのような気がします。

# 青空文庫情報

底本：「銀河鉄道の夜」角川文庫、角川書店

1969（昭和44）年7月20日改版初版発行

1993（平成5）年6月20日改版71版発行

入力：薦田佳子

校正：平野彩子

2000年8月25日公開

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランテイアの皆さんです。



# 四又 《よまた》の百合 《ゆり》

宮沢賢治

2020年 7月12日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>